

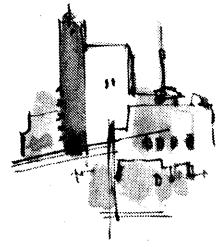
# 「幼児教育の源流」(IX)

## オベルリン

### 一 はじめに

近代教育思想家の中、コメニウス、ロック、ルソーなどは幼児教育の分野においてもすぐれた教育論を展開しているが、それらはおもに家庭教育を扱っている。彼らは、幼児は家庭で両親によって教育されるのが望ましいと考えていたので、彼らの教育論も主として家庭教育に限定されたのである。しかし、両親、とくに母親が家庭において子どもの教育ができるのは、恵まれた階級の家庭であって、生活のために働かなければならぬ貧しい家庭の幼児には、前述した思想家たちの教育論など適用されるはずはなかった。ところが、両親の労働中放任された幼児たちは、産業革命の発生とともに急増し、彼らの不幸な状

## 利島 知可子



態を救うためにも、幼児を対象とした新しい教育機関が必要とされたのである。もともと産業革命の起こる以前、すでにマニユファクチュアの時代において、労働者の幼児を収容する施設が自然発生的にヨーロッパ各地に存在していた。それらの施設の名称はさまざまであったが、イギリスのデーム・スクールに代表されるように、特別の子備教育を受けていない婦人が経営していたのである。彼女たちは、わずかの月謝をもらって自分の家で子どもたちを保護し、時には読み方や裁縫などを教えていた。しかしこれらの施設は、スクールとは名ばかりの貧弱な非能率的な施設であったので、急増した労働者の幼児を教育するという重要な課題を果たすことは不可能であった。また貧しい労働者はそれらの施設に払うわずかの費用も出せなかった。

このような状況の下で、ペスタロッチャーは、賃金のために仕事に出かけなければならぬ貧しい母親のために、就学前の子どもを世話をする「子どもの家」、あるいは「貧困児救済所」を設立したいと述べているが、実際に設立するには至らなかったところが、オベルリン Johann Friedrich Oberlin (1740-1826)

注①は、以前存在していた施設に比べて、制度的にも内容的にも整備した幼児保護施設を創設した。彼の施設は、ヨーロッパではじめて公的な性格をもった施設として注目されるだけでなく、後に設立された多くの施設の範となったのである。そこで次に、オベルリンの施設の位置づけや特質を明確にするための手がかりとして、産業革命期の幼児たちの状態や彼らのために設立された施設の実態について述べてみたい。

## 二 産業革命期における幼児教育機関

十八世期後半、イギリスをはじめとしてヨーロッパ各地に起こった産業革命は、単に産業上の変革にとどまらず、人間生活を根底からゆり動かしたのである。工業都市の出現とともに、農民たちは農村を離れて賃金労働者と化してしまい、少数の資本家たちに搾取されるようになった。そしてこれらの労働者の貧困と奴隷状態とがなかったら工業は存続することができな

ったであろうといわれるほど、産業革命は大量の労働者の犠牲によってなしとげられた。労働者たちは、長時間労働、低賃金、貧困などの悲惨な状態に追いこまれ、さらに機械が改良されるたびごとに失業の危険にさらされていた。このような労働者の家庭を救うためには、婦人や子どもたちまでわずかな賃金をもらって働かねばならず、また機械の発明によって彼らの労働も可能になったのである。母親は日に十時間以上も工場で過ごし、ほとんど自分の子どもの顔さえ見ることができない状態であった。そして家庭というものは完全に破壊してしまったのである。

以上のような、労働者の貧困、墮落、家庭の破壊、児童労働などは、当時の幼児たちにとどのような影響を及ぼしたのだろうか。放任された幼児たちはあらゆる種類の危険にさらされて成長していた。事故死や傷害などの危険のほかに、道徳的に好ましくないこと、怠惰や虚偽、不従順などの性格を身につけ、犯行に走る者や両親にすめられてこじきになる者もいた。そして彼らの死亡率は恵まれた階級の幼児に比べて圧倒的に高く、たとえば一八三五年ドイツのベルリンにおいて上流階級の子どもで五歳未満で死亡する者が57%であったのに対し、労働者の子どもは<sup>5</sup>34%も死亡していた。①また一八四〇年ごろ、イギリスのマンチェスターにおいては、上流階級の子どもで20%、劣

働者の子どもの死亡率は57%にも達していた。<sup>②</sup>さらに、貧困を少しでも救うために幼少のころから一時には二歳ごろから工場で働く子どもがふえ、わずかな賃金で働かせることができたので、資本家たちも競って幼児を雇っていたのである。これらの子どもたちは場合によっては、日に十四時間も労働をしなければ、仕事が終わると、ブランドー、タバコ、ワイセツ、トバクなどに休養を求めていたという報告もある。<sup>③</sup>

このような、幼児の悲惨な状態に心を痛めた当時の宗教家や有識者たちが、さまざまな立場から幼児教育機関を設立し始めたのである。それらの機関の教育内容も多様であったが、宗教・道徳教育、初等教育、手労働、身体の訓練などの内容は共通していた。まず、放任されている幼児は、将来無能力で怠惰な市民となり社会の重荷になるだろうという憂慮から、活動性、秩序愛、従順性、温和さなどの徳性を養うことが要求され、そのために、宗教・道徳教育が重視されたのである。次に初等教育が取り入れられたことは、生産性を高めるためには、読み、書き、計算などの知育を受けた労働者が要求されていたし、幼いころから労働にかり出されて初等教育を受ける機会に恵まられなかった子どもがかなり存在していたことによる。またこれらの機関は、おもに貧民や労働者の子弟を対象としていたので、

将来のためにできるだけ早くから労働に慣れさせる必要があった。そこで、幼児にでもできるような仕事、糸のもつれを解くこと・レース、紙ひも、毛糸などを編むこと・紙袋の製作・わら、リボン細工などが行なわれていた。最後に身体の訓練が重視されたことは、特に健康で力強く活発な労働者を育成するためにも当然であったといえる。以上の教育内容からも明らかのように、これらの機関は真に幼児への教育的配慮から生まれたものではなく、必要に迫られて設立された慈善施設にすぎなかったといえる。ゆえにこれらの施設は発生当時には、(1)子どもを生み、育てるのは両親の義務であり、母親による教育の方が施設で教育するより好ましい。(2)下層階級の子どもに教育を授けると、彼らの中に不満や不充足感が芽生えてくる。(3)子どもを両親から引き離し、長時間緊張状態におくことは、彼らにとって望ましいことではない。(4)それらの施設は、本来賞讃されるべきものではなく、家庭教育に代わる非常手段で単なる間に合わせにすぎない。<sup>④</sup> というような批判も受けていた。しかし(1)幼児たちがあらゆる種類の危険から守られた。(2)精神的、身体的、知的諸力を発達させ、また特に道徳・宗教教育を重んじたことにより、教会や国家の秩序維持に貢献した。(3)両親や兄弟から幼児の世話を引き受け、彼らは仕事や学校に専念できた。

(4) 幼少のころから働かざるを得なかつた幼児のために初等学校の代用も果たしていた、などの点は評価されており、このような施設は時代の要請に応じて次第に増加していったのである。そこで次にそれらの施設の発端となつた幼児保護施設の創設者であるオベルリンの生涯と、彼の施設の設立目的、教育内容、設立の背景などについて述べてみよう。

### 三、オベルリンの生涯

オベルリンは、一七四〇年ギムナジウムの教師の子として、ドイツのシュトラスブルクに生まれた。十五歳の時プロテスタント系のシュトラスブルク大学に入学し、神学と哲学を専攻した。そして二十三歳で哲学博士の称号を得た。一七六二年、二十二歳で大学を卒業し牧師の地位につくまでの三年間は、外科医、チイゲンハーゲン家の家庭教師となつてはじめて教育経験を積んだのである。一七六五年に家庭教師をやめると従軍牧師となり、一七六七年には正式にスタインタールのワルドバッハ注②の牧師に任命された。そしてその翌年、シュトラスブルク大学の教授の娘と結婚し、彼女は施設の子どものよき教師となつたのである。オベルリンの任地であつたスタインタールとは、語源的には「石の城」という意味で、その名の通り石の

多い土壌と長期間続く悪天候は農業に適さず、また前述したような産業革命もまだ起こつていなかった。ゆえに住民たちは貧困に苦しみ、オベルリンはまず、住民の生活条件を向上させることに心を傾けなければならなかつた。そこで彼は、牧場を作つたり、じゃがいもの栽培法を広めたり、橋や道路を整備してシュトラスブルクとの交通を可能にしたりした。また紡績工場を取り入れて産業の発展を計つたので、彼の着任当時には八十家族しか住んでいなかったワルドバッハにも、まもなく五〇〇から六〇〇もの家族が住めるようになった。

また、住民たちの教育条件もきわめて悪く、ことばは正しいフランス語とはほど遠い、全く地方的な日常語やラテン語系のみまりが使われていた。彼らの無教養は、経済的発展にとつても、また宣教の際にも大きな妨害となつていたのである。彼の教区には教会は三つあつたが、学校は貧弱な設備のものが一つしかなく、彼は学校の設立も行なわなければならなかつた。

以上のような社会事業や学校改革の一環として、幼児保護施設が設立されたわけであるが、彼は経済的、社会的、文化的発展のためには、七歳になつてはじめて教育を行なうのでは不十分であると認識しており、そのために就学前教育を体系化しようとしたのである。そこで彼は一七六九年の冬、編み物をじよ

うずに教えていたサラ・バンゼット Sara Banzett という女性を教師として迎え、幼児保護施設を開設したのである。

彼は元來鬪争的な性格の持ち主であり、幼少のころから軍人になりたいと思っていたのであるが、牧師の方がより多くの善を行ないうると信じるようになり、フランス革命当時にも教会の中でのみ古い秩序と戦っていた。このような彼の態度は革命に非協力的であるとみなされて、一七九四年から九五年にかけて過激なジャコバン黨員により牧師の地位を追われた。しかし一七九五年には復歸し、一八一八年には、当時フランスの最高勲章であったレジョン・ド・ヌール章を受けたのである。そして一八二六年、教区の多くの人々に見守られながら八十六歳の生涯をとじた。

幼児教育史家の R・ラスクは「牧師オベルリンにとって本来の使命は、教区内の宗教の普及、経済的、教育的発展であり、幼児保護施設などは単に副次的なものにすぎない」<sup>⑤</sup>とみなしているが、オベルリンの死後も住民たちはこの施設を高く評価して記念の募金を行なうようになった。そしてその募金により、保護施設の教育に従事した者に対して年百フランの賞金を与えたのである。

#### 四、オベルリンの幼児保護施設

前述したように、オベルリンが幼児保護施設を設立する直接的なきっかけとなったのは、一七六九年、バンゼットが近所の子どもたちを集めて編み物を教えていたのに出会った時である。着任以来放任された子どもたちに心を痛めていたオベルリンは、バンゼットを保母に雇い、子どもたちのために広い部屋を借りた。そこには三歳から六歳までの幼児が集まり、当時ではまだ珍しかった編み物も教えていたので、編み物学校、と呼ばれていた。このヨーロッパで最初に設立された施設も設備の不備や人手不足のためはじめの中、週に一、二回、後に月に十回程度開設されていたにすぎなかった。

この施設を訪問したある実業家は「オベルリンは、子どもたちがすることもなく村をうろついており、方言が唯一の言語として通用しているのを知って、そのような欠陥を根絶しようとした。そこで彼は夫人と協力して牧師を選び、大きな部屋を借りたり作ったりし、費用は自分で払った。これらの暖い広間には、あらゆる年齢の子どもたちが、女らしい母親のような保護のもとで過ごし、小さい子は遊び、大きい子は紡ぎ、編み物、裁縫を学んでいた。そしてそこでは方言を使ってはならなかつ

た」⑥と報告しているが、ここからも明らかのようにオベルリンは、施設の費用は自ら出していたし、保母たちの給料も自分で払っていたのである。また彼が施設を設立した動機もこの報告からわかるが、彼自身の言葉によると、まず第一に子どもたちは両親を助けるために働けるようになるまで、放任されているので多くの好ましくないことを学び、怠惰な人間になる。第二になまりのある方言は、フランス人に差別され、また説教や讚美歌を正しく理解できないと⑦、その動機について述べている。ゆえに彼は、保母たちに次のような使命を課していた。それらの使命の中に彼の施設設立の目的も明確にされているのであげてみると、

一、子どもの中に宗教的感情を発達させ、神への愛、両親・教師・恩人に対する尊敬と感謝、隣人愛を育てること。

二、子どもたちが秩序や労働を愛し、清潔、礼儀正しき、善行、正直などを身につけるように導くこと。

三、短い宗教的な歌詞や格言を教えたり、物語をくり返し聞かせて子どもたちの記憶力を鍛えること。

四、フランス語を習熟して、子どもたちの不明確な方言を根絶すること。

五、歌の指導をして、子どもたちが教会での礼拝の際、歌える

ようにすること。

六、散歩の際、子どもたちに植物の特色を教え、特に毒性植物には用心させること。

七、物語を話したり授業をしている間、子どもたちに年齢と能力に応じた手仕事ををさせること。⑧

などがあった。このような使命のもとに、内容としては、次のものが教えられていた。

**宗教・道徳教育**——道徳的なおはなし。お祈り。讚美歌。格言（特に聖書から取ったもの）。新、旧約聖書の中の物語。

**知育**——方言を除去するために会話の練習。『銅版画』による博物の学習。色彩感覚の訓練、木片や石を使って指示されたものを作る。

**手労働**——羊毛、木綿、亜麻、絹などの素材を分類する。いろいろな物体を色と形によって分類する。編み物。

ここに、宗教、道徳教育を重視していたこと、幼児の段階ですでに手労働を取り入れ、将来の労働者育成の役割を果たしていたこと、また初等教育も行なっていたことなど、前述した産業革命期の施設の原型を見ることができよう。

彼の教育法の中で注目すべき点は、聖書の物語や自然現象など、子どもたちの理解が困難なことを教える際に、できるだけ

彼らの直観にうったえようとしたことである。そのために、彼自身が考案した、彩色した銅版画や図などを用いていた。また子どもたちが楽しいふんい気の中で過ごせるように、散歩や遊戯を重要視していた。そのような彼の教育法は、次にあげた彼の手紙から明らかにされる。「私の妻や私が養成した保母たちは、歴史や動物、植物などを描いた図を使って子どもたちを教育した。それらの図には短い説明に添えて、正しいフランス語と方言の両方で名称が書いてあった。そして彼らにまず、それらの名称を方言で伝え、後にフランス語の名称を教えた。また彼らの四肢をしなやかにさせ、健康な身体を作るため、身体を鍛えるような遊戯で彼らを楽しませた。晴れた日には散歩に連れて行き、その際子どもたちは植物を摘み、保母はそれらの名を教えた。すると子どもたちは大きな声でその名称をくり返した。これらすべての教授は、遊戯の中で行なわれ、彼らにとっては大きな楽しみであった」

彼はこれらの方法を教師たちに徹底させるため、前もって彼女たちに教授法を指導していた。そして一クラスには、彼の指導を受けた保母のほかに、年長の女の子が助教師として保育にあたった。

彼はカンペ J. Campe (1746~1818) や、ロッセウ F. E.

Rochow (1734~1805) など、当時のドイツでは進歩的であった汎愛学派の教育者に精通していた。そして道徳教育の際賞罰の方法によって子どもたちを激励していた。たとえば教師は「よい子」の記録ノートを持っており、子どもたちの行動を三段階に分けて、すぐれたものから順に赤、緑、黒の点を書きこんでいた。そして学年の終わりに、優秀な子にはほうびと賞が与えられていた。このような方法によっては、一時的には子どもの行動が改善されるが、教育的には好ましい方法ではなく、廃止されるべきであった。注③

最後にオベルリンの施設をみる時、欠かすことのできない人物である L・シェプラー Luise Scheppler (1763~1837) について述べておこう。彼女は、十五歳の時オベルリン家の下女として雇われてきたが、オベルリンの指導を受けて保育に従事するようになった。元来子ども好きな性格であり、オベルリンの死後も保育や保母養成のために大いに貢献した。その功績が認められてパリの科字アカデミーから賞金五千フランを与えられ、彼女はその賞金で、五個の施設を新設したのである。

## 五、おわりに

以上述べたようなオベルリンの施設は、当時の工場経営者、

商人、知識階級の人々たちから支持されていたのである。たとえば自然科学者であったB・キュヴィエは「イギリスやフランスにおける保護施設は、オベルリンの施設に由来しており、ここでは労働者の幼児が保護され、当時町に広まっていた悪習や事故から守られた」と評価している。⑩また彼にならって施設を設立することは政府によっても奨励され、財政的援助を行なった。そして一八四〇年ごろ、フランスには約三百三十もの施設が設立され、二万八千五百人の貧民の幼児が収容されていたと報告されている。⑪

彼の施設はフランスやイギリスだけでなく、ドイツにも影響を及ぼした。ドイツに幼児保護施設が最初に設立されたのは、一八〇二年デットモルトのパウリネ夫人 Pauline von Lippe

(1769~1820) によってであったが、彼女はオベルリンの施設にヒントを得たのである。彼女の施設においては、宗教・道徳教育——道徳的なおはなし。新旧約聖書の中の物語。讚美歌。

お祈り。格言。知育——文字の練習。会話の練習。計算。手労働——小石、花卉などを品分けし、大きさ、色、形、重さによって分類する。縫い物。(女の子だけ)編み物。⑫などが教えられており、この教育内容と、前述したオベルリンの教育内容を比較してみれば、明らかにオベルリンの影響がうかがえる。

このように十八世紀終りから十九世紀にかけて、時代の要請に応えた幼児教育機関が、あるものはオベルリンにならない、また他のものは彼とは全く無関係に、ヨーロッパ各地に増設されていった。そしてフレーベルが幼稚園を創設した一八四〇年ごろそれらの施設は、イギリスで四〇〇、フランスで三三〇、ドイツでは一〇〇あまりを数えていた。しかしそれらの施設は、すでに二、で述べたようにあくまでも産業革命期の歴史的産物であり、真に幼児の立場に立った教育が行なわれていたとは言い難かった。また社会的、文化的発展を計ろうという大きな視点の下で幼児教育の段階にまで目を向け、幼児のための施設を設立したことはオベルリンの卓見であり、彼が幼児保護施設の創始者として名を残しているゆえんである。しかし、彼の理論も思想的には未熟であった。そこで幼児教育機関を真に幼きものの福音の場となし、幼児教育理論を樹立するためにもフレーベルの幼稚園創設が待たれたのである。

(広島文教女子短期大学)

#### 注

①彼はドイツで生まれ、ドイツで教育を受けたが、彼が牧師として着任したスタインタールが当時フランス領であったので、



フランス人とみなされる場合もある。その場合にはオベルランと発音される。

②この地方は当時フランス領であったので、バン・ド・ラ・ローシュと呼ばれていた。

③オウエン R. Owen (1771~1858) などは、子どもたちに愛情と信頼をもっていれば賞罰などは不要なものであり、不公正なものであると廃止していた。

#### 引用文献

- ① J. Kuczynski; Die Geschichte der Lage der Arbeiter unter der Kapitalismus. Teil I. Bd. I. 1961. s. 88.
- ② E. Bernstorff; Beiträge zur Geschichte der Vorschulzierung. 1961. s. 83.
- ③ F. モーリング・足利末男訳「ドイツ社会民主主義」上、ミネルヴァ書房、一九六八、四四ページ。
- ④ J. G. Wirth; Mittheilungen über Kleinkinderschulen und Rettungsanstalten für verwahrloste Kinder. 1840. s. 2 - 6.
- ⑤ R. Rusk; A History of Infant Education. 1956. P. 111/2
- ⑥ Dr. Hilpert, Stöber und Andern; Johann Friedrich Oberlins, Pfarrer im Steinthal, Vollständige Lebens-geschichte und

gesammelte Schriften. 1843. Teil. 2. S. 148 - 50.

⑦ E. B. Bernstorff. u. a.; Beiträge zur Geschichte der Vorschulziehung. 1968. S. 107

⑧ Dr. Hilpert, Stöber und Andern; a. a. O. Teil 3, S. 338 - 40.

⑨ Dr. Hilpert. Stöber und Andern; a. a. O. Teil 2. S. 480.

⑩ Ebenda. S. 149.

⑪ J. G. Wirth; a. a. O. S. 132.

⑫ J. Fölsing; Blüten und Früchte der Kleinkinderschulen. 1880. S. 147.

#### 参考文献

- ①小川正通「世界の幼児教育」明治図書、一九六六
- ②尾形利雄「産業革命期におけるイギリス民衆児童教育の研究」校倉書房、一九六四
- ③津守 真他「幼稚園の歴史」厚生閣、一九五九
- ④マルクス・レーニン主義研究所「イギリスにおける労働者階級の状態」大月書店、一九五六